

這年（一九一八）夏天，哥哥唸了童話〈蜘蛛、蛞蝓和狸貓〉與〈雙子星〉給我們聽，至今我仍清楚記得他當時的語氣。捧著剛出爐的童話處女作，第一個就想到要先跟我們這些家人分享的哥哥，臉上的表情是多麼地得意洋洋啊……。（宮澤清六「兄・宮沢賢治の一生」一九六四）

二十二歲的宮澤賢治自出生以來首次嘗試的創作童話〈蜘蛛、蛞蝓和狸貓〉，全篇充滿無厘頭式的幽默，可是對無情無義的物種生存競爭的描寫，卻是赤裸裸又血淋淋的，並沒有因為是童話而有所保留，許多弱肉強食的畫面甚至逼真到令人毛骨悚然的地步。從這篇處女作就可確認賢治當時已經具備存在論者的特質，透過非人類的觀點冷靜觀察人類社會的真實面。

生物為了延續生命，而必須以其他生物的生命作為糧餉以維持生命跡象，這是亙古以來所有物種被賦予的生存原罪，自然界所謂弱肉強食的生物鏈於是成為宇宙定律。從這種觀點來看，蜘蛛、蛞蝓和狸貓發揮天賦，活用智能以求溫飽，究竟何罪之有？放眼自然界，所有物種在生物鏈裡都有各自所需扮演的腳色，各盡本分，共存共生，維持地球生態的和諧。

與其說宮澤賢治用擬人化的手法描寫故事中的三隻動物，不如說他假借動物的造型，巧妙地包裝了人類貪婪縱慾、自私自利、虛偽欺瞞、傲慢自大以及暴虐邪惡的黑暗面。讓同樣具有這些負面人格特質的讀者，自動與非文明的動物腳色劃清界線，隔著相對安全的距離，坐觀低等動物的生死鬥。其

實，所有的讀者比誰都更清楚——在這場以地獄為終點的馬拉松比賽中，真正的參賽者不是蜘蛛也不是蛞蝓，更不是狸貓，而是以高等文明動物自居的芸芸眾生。

抬頭仔細觀察生活周遭的社群團體，你我身邊是不是也充斥著各式各樣的蜘蛛、蛞蝓和狸貓，虎視眈眈地鎖定可以讓他飽餐一頓的獵物呢？當然，真實社會的結局，也許不像故事中那樣單純，不管是裸裎殘忍根性的蜘蛛，還是狡猾的偽善者蛞蝓，抑或假借宗教之名蠱惑生靈的狸貓，通通難逃墮入地獄的懲罰。

許多研究者因為這種了無新意的陳腐結局，批判這篇處女作結構尚未成熟、人物情節設定不夠嚴謹。筆者認為上述批評過於吹毛求疵。畢竟對年僅二十二歲篤信法華經的青年賢治來說，他是寧願相信勸善懲惡的教條法理，認為善有善報、惡有惡報的因果業障，對大多數良善的民眾是一種精神的救贖。

宮澤賢治在累積幾年社會經驗，創作概念更臻圓熟之後，重新詮釋這篇作品，先是將它改寫成〈三位山貓學校的畢業生〉（「山猫学校を卒業した三人」）；之後又改寫成〈寓言 三位洞熊學校的畢業生〉（「寓話 洞熊学校を卒業した三人」），嘗試加入不同人物的多元觀點，讓這篇處女作可以更精準地傳達他的創作意圖。

建議讀者可以找機會閱讀本篇系列作品，探索宮澤賢治追求藝術的執著與自我修正的軌跡。當然最不能錯過的是：仔細觀察登場人物的設定、復誦文中刻意安排的反復對白以及隨興插入的古代謠曲。畢竟唯有重現近百年前賢治朗讀這篇作品給弟妹聽的情境，才能親身體會宮澤賢治童話的原創魅力，享受賢治童話世界釀成的醍醐味。



原文鑑賞

蜘蛛となめくじと狸

みやざわけんじ
宮沢賢治

蜘蛛と、銀色のなめくじとそれから顔を洗ったことのない狸とはみんな立派な選手でした。

けれども一体何の選手だったのか私はよく知りません。

山猫が申しましたが三人はそれはそれは実に本気の競争をしていたのだそうです。



一体何の競争をしていたのか、私は三人がならんでかける所も見ませんし学校の試験で一番二番三番ときめられたことも聞きません。

一体何の競争をしていたのでしよう、蜘蛛は手も足も赤くて長く、胸には「ナンペ」と書いた蜘蛛文字のマークをつけていましたしなめくじはいつも銀いろのゴムの靴をはいていました。又狸は少しこわれてはいましたが運動シャツポをかぶっていました。

けれどもとにかく三人とも死にました。

蜘蛛は蜘蛛暦三千八百年の五月に没くなり銀色のなめくじがその次の年、狸が又その次の年死にました。三人の伝記をすこしよく調べて見ましよう。



一、赤い手長の蜘蛛

蜘蛛の伝記のわかっているのは、おしまいの一ヶ年間だけです。

蜘蛛は森の入口の檜の木に、どこからかある晩、ふつと風に飛ばされて来てひっかかりました。蜘蛛はひもじいのを我慢して、早速お月様の光をさいわいに、網をかけはじめました。

あんまりひもじくておなかの中にはもう糸がない位でした。けれども蜘蛛は「うんとこせうんとこせ」と云いながら、一生けん命糸をたぐり出して、それはそれは小さな二銭銅貨位の網をかけました。

夜あけごろ、遠くから蚊がくうんとうなつてやって来て網につきあたりました。けれどもあんまりひもじいときかけた網なので、糸に少しもねばりがなくて、蚊はすぐ糸を切つて飛んで行こうとしました。

蜘蛛はまるできちがいのように、葉のかけから飛び出してむんずと蚊に食いつきました。





蚊は「ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい。」と哀れな声で泣きました
が、蜘蛛は物も云わずに頭から羽からあしまで、みんな食ってしまいました。そし
てホッと息をついてしばらくそらを向いて腹をこすってから、又少し糸をはきまし
た。そして網が一まわり大きくなりました。

蜘蛛はそして葉のかげに戻って、六つの眼をギラギラ光らせてじつと網をみつめ
て居りました。

「ここはどこでござりまするな。」と云いながらめくらのかげろうが杖について
やって参りました。

「ここは宿屋ですよ。」と蜘蛛が六つの眼を別々にパチパチさせて云いました。

かげろうはやれやれというように、巢へ腰をかけました。蜘蛛は走って出まし
た。そして

「さあ、お茶をおあがりなさい。」と云いながらかげろうの胴中にむんずと噛みつ
きました。

かげろうはお茶をとろうとして出した手を空にあげて、
 バタバタもがきながら、
 「あわれやむすめ、父親が、

旅で果てたと聞いたなら」

と哀れな声で歌い出しました。

「えい。やかましい。じたばたするな。」と蜘蛛が云いました。するとかげろうは
 手を合せて

「お慈悲でございます。遺言のあ

いだ、ほんのしばらくお待ちなされて
 下されませ。」とねがいました。

蜘蛛もすこし哀れになって

「よし早くやれ。」といってかげ
 ろうの足をつかんで待つていまし
 た。かげろうはほんとうにあわれな



細い声ではじめから歌い直しました。

「あわれやむすめちちおやが、

旅ではてたと聞いたなら、

ちぎいあの手しろてに白手甲、

いと巡礼じゆんれの雨あめとかぜ。

もうしご冥加みやうがが報謝ほうしゃと、

かどなみなみに立つとても、

非道ひじゆうの蜘蛛くもの網あみぎしき、

さわるまいぞや。よるまいぞ。」

「小しやくなことを。」と蜘蛛くもはただ一息ひといきに、かげろうを食くい殺ころしてしまいまし

た。そしてしばらくそらを向むいて、腹はらをこすつてからちよつと眼めをぱちぱちさせて

「小しやくなことを言うまいぞ。」とふざけたように歌うたいながら又糸またいとをはきました。

網あみは三まわり大おほきくなつて、もう立派りっぱな蜘蛛くもの巣すです。蜘蛛くもはすっかり安心あんしんし



で、又葉のかげにかくれました。
その時下の方でいい声で歌うのを
ききました。

「赤いてながのくうも、

天のちかくをはいまわり、

スルスル光のいとをはき、

きいらりきいらり巣をかける。」

見るとそれはきれいな女の蜘蛛

でした。

「ここへおいで。」と手長の蜘蛛

が云つて糸を一本すうつとさげて

やりました。

女の蜘蛛がすぐそれにつかまっ

てのぼって来ました。そして二人は夫婦になりました。網には毎日沢山食べるものがかりましたのでおかみさんの蜘蛛は、それを沢山たべてみんな子供にしてみました。そこで子供が沢山生まれました。ところがその子供らはあんまり小さくてまるですぎとおる位です。

子供らは網の上ですべったり、相撲をとったり、ぶらんこをやったり、それはにぎやかです。おまけにある日とんぼが来て今度蜘蛛を虫けら会の相談役にするというみんなの決議をつたえました。

ある日夫婦のくもは、葉のかけにかくれてお茶をのんでいますと、下の方でへらした声で歌うものがあります。

「ああかい手ながのくうも、

できたむすこは二百疋、

めくそ、はんかけ、蚊のなみだ、

大きいところで稗のつぶ。」